

インターネット公的領域の目標追求性

—「飯見て逃げた上海少女」をめぐるネットの反応を例に—

戸 暁輝

HU Xiaohui

翻訳：西村 真志葉

はじめに

民俗学の起源は、その多くを、ロマン派による日常生活の発見と再認識のなかに求めることができる。ほとんどの民俗学者は、ロマン主義に起因するこのディシプリンの起源をおおよそ正しく理解していないものだが、その一方で、1946年にはすでに「民俗学は(人)民の生活の科学」だと明言したスイス人のリヒャルト・ヴァイスのような民俗学者もいる[Weiss 1946]。1960年代以降、フッサールの生活世界概念が民俗学に導入されると、ドイツやスイス、オーストリアを中心とするドイツ語圏の民俗学では、このディシプリンの新たな方向性が、日常文化と生活世界研究に定められた[戸 2010: 288]。民俗学は民衆が日々用いながらも気づかない日常生活の諸事象をその学術的視野に収めるが、それは単に事実を観察するためだけではない。そのなかの超越的意義と超越論的価値を理解するためでもある。また民俗学は、研究対象の失われた一部を捜し出して補填するためだけに、日常生活の諸事象を見つめるのでもない。現代化のさなかにあるそれらの合理的かつ合法的な地位を確立し、正当な機能を発揮させることで、日常生活における理性的な目的を再認識し、賦活化するためでもあるのだ。

通俗的にいえば、いわゆる超越的な意義というのは、経験を通じて認識されるのではない意義のことである。一方の超越論的価値とは、経験的な認識に先行しながらも実践の経験を導き、決定づける価値のことだが、おもに行為の理性的な目的を指す。実践という領域においては、普通の人々であっても、超越的意義と超越論的価値という立場から諸問題を見ているものである。本稿では、「飯見て逃げた上海少女」というインターネット上を騒がせた事例を基に、この点を説明しようと思う。またそれとあわせて、民俗学が日常生活を研究するかたちについても、一考してみたい。

1. 経験的な事例における超越性と超越論性

旧正月を目前に控えた2016年初頭、北上^{ベトナム} 広などの大都市から人影が消え、一部サービス業が営業不能の危機に陥ったとのニュースが流れた。同じ頃、メッセージアプリWeChatの各グループ内では、複数枚の比較画像が拡散されていた。いずれも、おしゃれて垢抜けた都会の女性が、帰省後見る影もなく泥臭くなる様を表現したもので、こうした不条理とも言える現象はネット上

で「美女に化けた白骨夫人が、孫悟空に看破されて^{キョンシー}僵尸に戻される」と揶揄された[丁啓陣 2016]。実際、毎年旧正月の前後約1ヶ月間は、中国大陸に数億人規模の人口流動が出現する。これは数億人が帰省のために服する兵役であり、周期性のある民族大移動としては人類史上最大規模のものだといえるが、これは中国色の強い日常生活のひとつコマでもある。

だが、帰省する人々を目で見ることはできても、その考えまで見ることはできない。もちろん、中国都市部と農村部の巨大格差が多くの人々にもたらした精神的断裂、そして日常生活に及ぼす長期の変容などにいたっては、さらに目に映らない。20年近く前、農家出身の筆者は、「故郷に逃げ帰るような姿勢を保ち続けて」おり、自分が「両親が育てあげた^{変異体}であり、故郷に推挙される^{反逆者}である」と書いたことがある[戸 1999]。それは筆者が、両親や故郷の暮らし方を引き継ぎもせず、かといって彼らの運命を変える力もなく、唯一できることといえばおそらく沈黙を拒み、語ることしかない、と感じていたからだ。「僕の世代からはもう沈黙はしない……僕はあなたたちに育てられた喉だ、舌だ！あなたたちが代々続けてきた沈黙が、僕を通して声となり、響くのだ！」[戸 1996]。これは一人の青年が抱いた美しい理想であった。しかし、当時、わずかな人々の声であっても、それが伝えられ、注目を集められる範囲というのはかなり限られていた。だが現在では、当時の理想がまさに現実となりつつある。というのも、1人の普通の人による発言や書き込みであっても、数万人の関心を集め、論争を巻き起こすことが可能なのだ。今日のようなオールメディアの時代にあつてこそ、普通の人々はより平等に発言可能な条件を手に入れられる。「データ量の増加に伴い、現状は一変した。誰でもソーシャルメディアを通じて閲覧でき、伝言を残せる。今では個人的な必要に応じて、すぐスマートフォンでインターネット上のホットな話題を調べられる。……もはやソーシャルメディアは特別な出来事を周知させるための空間ではなく、自らの日常生活を意図的に周囲へ伝えるコミュニケーション空間なのである」[宋 2015: 19]。

中国では、セルフメディアに書き込むことが個人情報への主要な伝達手段となっている。現在、中国のネットユーザーは6.88億人、インターネット普及率は50.3%、そのうちモバイルネットユーザーは6.2億人、実に全体の90.1%を占め、Wi-Fi使用率は91.8%にもものぼる。ユーザーがモバイル端末からミニブログやメッセージのやりとりで費やす時間は増え続けており、WeChatの総アカウント数は1,000万をゆうに超えている。ユーザーがインターネットやモバイルネットワークを通じてブログやメッセージを書き込み、転載、拡散するという新しい情報伝達のかたちは、人々の暮らし方をも変えている[周明華 2016]。したがって、インターネットというものは、普通の人々が自らの日常生活を語り、論評する際に、かつてない便利な諸条件を与えてくれるものだ、といえるだろう。民俗学がこうした日常生活における言説をいかに見つめるか、何をどう見つめるのかという問題を、私たちは考えざるを得ないだろう。

2016年2月6日19時28分、ハンドルネーム「想説又説不出口」を名乗る人物が、コミュニティサイト籬笆網に『別れなくなったんだけど……』というスレッドを立てた。「上海少女」を自称するこの人物は、家族の反対を押し切って、恋人の実家がある江西省の農村で旧正月を過ごそうとしたものの、最初の食事を見た瞬間に後悔し、恋人と別れて上海に戻ることにしたのだという。このスレッドはネット上で話題を集め、2月11日15時までに、じつに214,957回閲覧され、コメント数も7,717を数えた。ハンドルネーム「KDS寛帯社」が、この一件を新浪ブログで発表すると、その記事は2月16日15時までに61,373回転載され、191,069のコメントとともに85,534の高評価ボタンが付けられた。その後、財經網や華西都市報網、成都商報網、東方今報網、重慶商報網など複数のメディア系ブログもこの動きに参画した。2月16日15時までに、「#最初の食事を見てもう

別れたい#』という話題は1.1億回読まれ、総コメント数は10.1万、ファンは5.6万人を数えたという[長安剣 2016]。

2月21日には、元スレッドのクリック数は340,000回、コメント数は16,000を超えていたが、すでに複数のユーザーが投稿された記事の真偽に疑いを呈し始めていた[中国網 2016]。まず2月17日に、新浪網のニュースサイトで「飯見て逃げた上海少女」はまったくのでたらめだとの見解が示された[新浪新聞 2016]。2月19日には、この物語が「ネット上の黒幕が創り出したものだが、その動機は不明」とする声も上がっている[陳方 2016]。そして2月20日、搜狐、鳳凰網、網易、新浪などの大手サイトにおいて、調査の結果、この物語はフィクションにすぎないことが裏付けられたと発表された[搜狐新聞 2016]。多くのネットユーザーが次々にコメントを書き込み、この作り話の作者を厳しく叱責した。ある者は次のように述べている。「事がニセモノなら、それが映し出す問題もまたニセモノだ」[敬一山 2016]。「コメントは論理的な基礎の上に行われてはじめて説得力を持つが、論理的な推測は報道の事実をその起点とする。その事実が存在しないとなれば、後でどんなに多くを語っても、根本的に成り立たなくなる」[曹林 2016]。また、次のような問題も提示された。「‘上海少女’はニセモノだったが、なぜ全国のユーザーはこの虚構劇を真実と受け止めたのか」[唐映紅 2016]、「事実が存在しないにしろ、この存在しない事実がこれほどまでに多くの注目を集め、議論を巻き起こした、このこと自体がニュースではないか」[深山野民 2016]。「かつてのネットを騒がせた諸事件と異なり、今回世論の焦点は、事件そのものの真偽にはなかった。ネット上では元記事の信憑性を疑う意見も少なからず見受けられたが、それらが十分な関心を集めることはなかった」[馮雪梅 2016]のである。

事実、これ以前にも、ネット上では次のような指摘がされていた。まさにこの事件が「一瞬で無数の人々の感情の神経を傷つけた」[李拯 2016]がために、しかも社会が普遍的に関心を寄せる問題とも無関係でないことから、この事件の真偽のほどが重要ではなくなったのであり、多くのユーザーは「その真偽を議論したくない、ただそうした現象について語りたい」[才讓多吉 2016]と考えたのだ、と。さらにはこう考えるユーザーもいた。「‘上海少女’と‘江西鳳凰男子’が実在するかどうか気にする者はもうほとんどいないが、これは、旧正月から今日まで続く議論が至った最も格調高い領域だろう。報道をめぐる評論は事件の真実性に基づかなければならないが、ただ今回に限っては、主人公の真実性が、都市部と農村部に二分される社会構造が映し出す普遍的な真実性の影に、すっかり霞んでしまった。もはや‘上海少女’とは記号にすぎず、それは単に上海や男女間の愛情のみを代表するのではない、都市、そして生活態度全般を代表しているのだ」[劉雪松 2016]。こうした点において、「すでにでたらめだと証明されたこの記事は、暇人がストレス解消のために書き込んだというよりは、公共的な議題を成功裏に提示したといった方がよいだろう。(略)なぜひとつの創作記事が人々の関心を集め続け、あるいはごり押しされ続けたかといえ、たんに世論が信じやすく浅はかなためだけではなく、むしろ、仮にこの件が真実であっても驚くに足りないからだろう。(略)それはまったく虚構の逃走劇であるにしろ、偶然では片付けられない現実を多く含んでいる。論破できる記事ではあるが、これは落とす前につけきれない現実でもあるのだ」[楊耕深 2016]。

経験的な観察の視座に立てば、この事例のなかにさまざまな現象、たとえば赤の他人への罵詈雑言やストレスの発散、特定の地域や性別に対するヘイトスピーチなどを当然のように見出すことができる。もしもこうした経験的観察に視野を限定すれば、偏った、ひいては極端な観点が導かれるだろう。「実際、こうした観点は個人的な経験に基づいて異なる角度からひとつの巨大生物を多視点遠近法で見ているのであり、真実に背を向けているわけではないが、見えているのは

どこか偏った真実である可能性は否めない」[南方都市報 2016]。そこである者は、「傍観者の情熱を感情移入することで、本来公的関心を厳粛に交流させた結果であるべきはずの世論を、奇をてらい、道徳を振りかざすだけのゴミ屑へ、感情の肥壺へと変化させる」、つまり「相互的なラベルの張りつけあい、意見が対立する議題を討議するかたちとなり、公的事件を通じて既成認識を固定化し、感情の排泄欲を満たす」と考える[余旖 2016]。また、次のようなコメントをしたユーザーもいる。

セルフメディアの利用者の中には、そもそも事件の真相をまったく気に留めない者もいる。セルフメディアの表現において、一部の人が求めるのはお祭り騒ぎができる話題と茶々を入れる機会である。それが伝統的なメディアによる報道であろうと、あるいはネット掲示板の書き込みであろうと、人々は時に事実の真偽ではなく、熱狂できる対象や導火線になり得るかどうかを気に掛ける。それは、誰でも参加可能な開放性を有していること、集団で群がりその偏った私見を吐露する刺激を感じられること、また話題の背景に人々が直視せざるを得ない、かつ共鳴を呼ぶ社会問題が潜んでおり、実は重たいものであること、などが求められる。このようにして、重たいものを軽々しく、あるいは逆に軽いものをいかにも重そうに扱う憂さ晴らしや冷やか、皮肉のなかで、すべての人々がツッコミや揚げ足取りに興じる話題が出現するのだ。

このような話題をめぐるお祭り騒ぎは、セルフメディアの表現としては、普遍的なものになりつつある。一部の人は、ラベル化、細分化した表層的なもので自己を表現するのが好むが、まるでそれ以外に自分の存在を証明し、内なる感情を表出する術を持たないかのようだ。これはセルフメディアというメディア自体が持つ特徴と無関係ではない。セルフメディアは本来深いものを表現するのにあまり向いておらず、そもそもは一種の社交媒体としての意味合いが強い。こうしたセルフメディアが自己表現や表現の権利を満足させるツールとして扱われるとき、一つの問題を深く掘り下げて表現する能力や機会に乏しい人たちは、表現をパフォーマンスと見なし、またツッコミを表現と見なす。その結果こそが現在われわれが目に見ている光景なのであり、そこでは、少なからぬセルフメディアがお祭り騒ぎに溺れ、もはや自力では抜け出せなくなっているのである[夏振彬 2016]。

しかし、本稿はこうした経験的な観察に、考察の視座を限定するつもりはない。むしろ、単純な経験的観察を超越し、経験の中の超越論性、ひいては超越性を見たいと思う。筆者はまず、理性的な目的論の立場を取ることとする。つまり、ネットユーザーが理性的な行動者であると仮定し、終始同じ仮定に基づいたうえで、このネット討論の事例を見つめるのである。理性的な目的論の視座から見るということは、ユーザーの理性的な目的を強調し、それに着目するということであり、したがって、上述のような個人的な憂さ晴らしや嘲笑、皮肉、揚げ足取り、付きまといといった非理性的な現象にのみ注目するのではなく、彼らの理性的な動機を発見することに重きを置くことになる。また同時に、この立場は本稿が個別事例について行うのは質的評価のみであり、心理学的な意味における量的基準を用いたり、統計学的な意味において経験的帰納法で個別事例を扱うものではない、ということも意味している。仮に、統計学上のデータ量や経験的に帰納されるデータにのみ準拠するならば、おそらく、ほとんどのユーザーはあまり理性的でない、理性に欠いている、といった結論が導かれてしまうことだろう。筆者が本稿で取る立場について最後に説明しておきたいのは、元記事の内容の真偽については言及しない、という点である。た

と元記事の内容がデマカセであろうと、それにより元記事についてのユーザーの発言が的外れなものになってしまうおそれ、この記事が引き起し、かつ関連する社会問題について展開されたネット上の討議はいぜんとして真実であり、有効であるからだ。

要は、本稿は一つの記事をめぐって繰り返されたネット討議を対象にしたケース研究である。筆者は「飯見て逃げた上海少女」という元記事およびそのコメントについて詳細な記録や正確な統計的分析を行うのではなく、この事例を通じて、中国のネットユーザーがインターネット上の公的領域に寄せる理性的な期待と擁護、つまりそこに秘められる彼らの目標追求性を見つめたい。

実際、「飯見て逃げた上海少女」のスレッドが立てられた後、多くのユーザーがコメントを投稿し、感情を発散したり主観的な意見を任意に述べたりしていたが、記事内容の真偽について疑問を呈したのはごく一部にすぎず、より多くのユーザーたちは元記事を超越し、より深い理性的な思考と批判を行っていた。彼らの分析と思考はもはや元記事を対象としておらず、彼らがかくあるべきと考える意義・価値と、現実の意義・価値のあいだに横たわる強大な落差に向けられている。たとえば、ハンドルネーム「霍真布魯茲老爺」は次のように主張する。「都市部と農村部の二分体制はまさに中国を二つの異なる部分に引き裂いているが、経済から文化に至るまでまったく交りあわないこの二つの部位は、不幸なことに、旧正月という時代遅れの伝統行事や高速鉄道のような最新すぎる交通手段によって、一気に引き合わされて気まづくなる。この事案は、最初の書き込みが巧妙であったかどうかはさて置き、都市部と農村部の巨大格差こそがその後ネット上で意見の対立を招いた根本的な原因なのである」[霍真布魯茲老爺 2016]。この都市部と農村部の格差を招いた原因として、ハンドルネーム「阿強同志」は「農民が怠け者で愚かだからではなく、政策が完全に不平等であることがより問題」としている[阿強同志 2016]。したがって、「姚樹潔」は「農民の運命を変え、真の意味で農民を国民と見なすことによるのみ、中国は本当に台頭するのであり、その経済成長と社会発展の継続化を望むことも、文明的な列強諸国の仲間入りをすることも可能になる」と指摘する[姚樹潔 2016]。さらに「楊耕身」は次のように論じている。「躍動する中国だが、農村と農村で暮らす人々をしばし待たねばなるまい。そこは私たちが生まれた地であり、いずれ帰る場所である。その場所を私たち自身、馴染みのない地帯にしてはいけない。それはより大きな中国であり、より大きな未来なのだ」[楊耕身 2016]。

また、農村のある側面が美化され、ロマン化される事態に対し、先験的な内省と超越的な批判を行ったユーザーもいる。「陳嵐」は「この数十年もの間、わが民族は非常によからぬ文化的価値観を育ててきた。貧困を道徳と混同し、高尚なものとして粉飾し、『貧しければ貧しいほど誇らしい』、『貧乏人には気概がある』と機械的に受け止めるのだ。また老化現象も同様に神聖化され、『彼はこれほど長く生きてきたのだから少々説教じみたことくらい言ってもいいではないか』という具合に、特権が賦与される。弱さを示すことが力となる場合が多いゆえに、人々は弱い私の言い分には一理あり、貧しさを盾に良からぬ行いも許され、裸足でも靴はいらぬ、と考えるのである」[陳嵐 2016]。次のように指摘する者もいる。「長年にわたり、我々の粗末な実用主義の文化的コンテクスト下では、摩訶不思議なロマン主義的コンプレックスというべきものが育まれてきた。これは貧困を品格化、道徳化し、また農村を故郷化し、アナクロニズムをロマン化する」[南方新聞網 2016]。「麦徒」は、持続的でしつこい「儀礼性」が「まさに農村社会の精神虚無化を招くある種の伏線となっており、こうした公序良俗の範囲を逸脱する観念の縛りは、時に農村社会の物質的貧困よりも耐え難い。その自由な精神に対する縛りや異質な生活習慣への許容力の低さも、都市と農村の文化的差異を創り出す直接の原因として常に存在する」と述べる[麦徒 2016]。そして「魏春亮」は、郷里の日常生活を連想しながら、次のようにコメントしている。

そうだ、実家あたりの村人たちは、今でもほとんどが古い世代の生活様式で過ごしている。彼らの考え方を変えるということは、彼らの社会全般に対する総体的な認識をひっくり返すことに等しい。これは、彼らにとって災難に違いない。……世界は驚きの速さで前へ進み続けている。一方僕の郷里の人たちは、まるで長い、長い、古い夢の中に浸っているかのようだ。

だが、もう一つ僕を不安にさせる事実がある。それは、農村がいよいよ袋小路に追い詰められたとき、僕の村の農民たちはその恐ろしさをまだ意識していなかったことだ。……

現代化した色んなルールに直面した彼らは、あたかもぼんやりした霧の中で暮らすかのように、自分でもよく分からない生活を送っている。これはより大きな不平等だ。農村の近代化が進むにつれて、また、ルールがより整備されるに伴い、農民は現代化のルールの外へ遺棄され、次第に周辺化していった。鎮政府の政務サービスホールに来たものの、なんと声を上げればよいか分からずビクビクして入口に立っている老人、彼はこの現代化のなかで見捨てられた哀れな人なんだ[魏春亮 2016]。

‘聞欣’は、現代的価値観に対する超越的視点から、次のようにまとめた。「いわゆる農村問題は、そのすべてが中国の問題である。農村に関心を持つ際、特別な憐れみを持つ必要もないし、昔の貧困救済の考えを誇示する必要もない。真に農村に関心を寄せる人が高らかに謳いあげるのは、原始的な田園牧歌ではなく、現代人に属する安心感であり、自由感である。主権を民に返すこと、農村の人々に自分の土地や財産、転居の自由についてもっと語ることができる権利を付与すること、都市部と農村部で人々が所有する権利の格差を解消すること、これは農村問題の解決につながり、また、中国社会の治安体系をより改善するための糸口となり得るだろう」[聞欣 2016]。‘単士兵’は、理性的な超越論的視座から、また別の総括をしている。「過度に牧歌化したり、盲目的にその衰退を憂いたりするのは、いずれも農村に対する誤った態度である。(略) 故郷を見る際、中国の政治・経済・社会を含む大きな体系の枠組みに当てはめて、これを理性的に認識し、積極的な再構築を試みるのでなければ、それは偽善的な、単純な、そして粗暴な情緒の表出となってしまいうにすぎず、個人にとっても、社会や国家にとっても、何の利益ももたらさない」[単士兵 2016]。

このネット討論において、多くのユーザーが農村出身者であったかもしれない。だが、彼らはたんに自らを重ねて感情を発散していたのではない。というのも、彼らはこうした感情の発散が何の役にも立たないばかりか、むしろ有害であることを知っており、しかもそこには理性的な目標追求性がはっきり見て取れるのである。彼らは自分たちの真実の考えを表現すると同時に、少なくとも、沈黙する家族の声を代弁してもいる。こうした考えや声は、彼らがその長年沈黙したままの家族たちと同様に、目の前にすでにある経験的事実の前で立ち止まっているのではない、ということを示すには充分だろう。自らの日常生活について、彼らはすでにある当たり前の経験的事実に満足するだけでなく、彼らなりの超越論的な、超越的な目標追求性を持っている。私たちは目的論の視座に立つことによってのみ、このネット討論に含まれる理性の超越論的意義と超越的価値をより明確に見出すことができるだろう。

2. インターネット公的領域への理性的参与およびそのルール

もしも経験的観察の視座からのみ見るならば、私たちの目に映るのは一つの虚構記事が「中年にユーザーをサル扱いしてからかう」[劉徳泰 2016] のようなドタバタ劇だけだろう。だが実際には、多くのユーザーがただ感覚的・情緒的であったわけではなく、理性的な目標追求性を有していたことも見逃してはなるまい。私たちが、目的論的視座に立つ必要があるのは、このネット議論においてユーザーたちがすでに目的論的立場を有しているからでもある。

かつて、中国の伝統的な日常生活においては、礼楽制度によって貧富貴賤の社会的等級が厳格に区分されており、自然にできた公共の場はあっても、本当の意味における公的領域には乏しかった。なぜなら、公共の場は自然にかたち作られた空間であり、一方の公的領域とは理性により建設され、制度で守られた結果だからである。公共の場ではすべての人が発言権を有しているわけではないが、公的領域はすべての人が平等な発言権を有することを目的としている。一般的に、年中行事という日常生活の中の非日常時に、多くの中国人は「行事期間限定で叫び、発言する一時的な権利を獲得するものの、日常生活の中でそれを奪取し、改善しようとはしない」とされる[馬小塩 2016]。これは中国の公共の場に関する、部分的な本質的特徴であろう。

だが現在、インターネットの普及に伴い、中国のネットにおける公的領域はかつてないほどに成熟している。「飯見て逃げた上海娘」をめぐるネット議論においても、ユーザーたちは機械的に自らの理性的能力と判断力を用いており、また理性を欠いた感情的な言論と口汚い言葉を蔑み、無視したのである。「インターネットでは、いろいろな思想が交錯し、ぶつかり、融合する。さまざまな理性的な声と非理性的な声が競り合う。昔であれば、理性批判の能力を有した人は、その見解を心の奥底に隠すか、ごく周囲の人に話すことしかできなかったものだ。だが、インターネットが普及すると、彼らの理性的な声はより広い範囲で伝えられるようになった。同時に、非理性的な声も、ユーザーたちによって叱責され、自制を促され、人々は口論や弁論のなかで真理を得てゆくようになった。また、ネット議論には匿名性等の特徴があり、この特徴は本音を吐露し、真実を語ろうとするユーザーの背中を後押しした。さらには人々の批判精神と民主意識を刺激し、より広域な、より深みのある公的領域の構築にひとつの可能性も示した」[李潔 2011]。重要なのは、見解の内容上、誰が正しくて誰が間違っている、ということではない。皆が平等な主体として、しかも相互的に主体(交互主体)と見なし合い、自らの言論に責任を負うことが大切なのであり、「これはネット空間に責任を負うことであり、自らに対して責任を負うことに等しい」[一介草民 2016]。同様に重要なのは、異なる見解が同じ論理規則に従い、平等な言説として位置づけられて表現され得る、という点である。このような形をとってはじめて、異なる言説と見解の間に平等な対話と競争が存在し得る、なおかつその真偽や正誤を認識するのに役立つのだ。

以上から分かるように、「飯見て逃げた上海娘」をめぐるネット議論において、中国のインターネットユーザーたちは暗黙の了解で公的領域を黙認しており、これはまさにハーバーマスの次の言葉のとおりである。「コミュニケーション行為のなかにあっても、黙認される起点はやはり、すべての参加者が責任能力のある行動者(Aktoren)だということだ。これはまるでコミュニケーション主体の自己認識であり、つまり彼らは理性的な動機からとった立場を効果として要求するのである。こうした行動者たちは、自分たちが事実上理性的のうで弁護され得る理由を持って行動している、と互いに互いを仮定しているのだ」[Habermas 2001: 28-29]。ここで強調されている「事実上(tatsächlich)」という言葉は、単純な経験的事実を指すのではなく、超越論的な立場と超越的な立場から仮定される事実を指すものである。つまり、コミュニケーション行為の主体

は、経験的事実の上で全員がそうでないにしろ、あくまで事実上は理性的規則に沿って行動していると超越論的に、超越的に仮定しているのである。ハーバーマスが提示したこのような理想類型は、あきらかに経験的観察やまとめによるものではなく、超越論的・超越的目的論によって設定されるものである。ただし、こうした設定は超越論的・超越的なものであるといっても、人間の実践的な経験から完全に隔離されているわけではないし、人間の実践的経験の目的と趣旨はあくまで実践的経験の中で(たとえ部分的であろうとも)実現されるべきであり、かつ実現し得るのであり、そして実際すでに実現されているのである。

もしも経験的観察に視座を限定すれば、私たちはハーバーマスの公共圏 (Öffentlichkeit / public sphere) 概念の目的論的立場を見過ごしてしまうだろうし、そもそも中国のネットユーザーの目標追求性に気づくこともなかっただろう。したがって、ハーバーマスの概念と中国のインターネット公的領域が、その目的論的立場において内的な関係性と精神的合致を有することを考察するなど、もちろん不可能なはずである¹⁾。中国の一般的なネットユーザーがハーバーマスのように専門的、哲学的な記述を行うことはあまりないだろうが、しかし、今回のネット討論において、彼らはハーバーマスと同じように、超越的で、超越論的な目標追求性を有している。それはもちろんユーザー全員がハーバーマスの論著を読んだ、あるいはその主張を理解した結果ではない。むしろ、この種の予期せぬ一致は、公的領域において効果的かつ理性的なコミュニケーションを行うには、かならずこうした超越論的・超越的条件を備えていなければならない、と自覚する中国語ユーザーがしだいに増えてきたためだろう。もちろん、こうした条件について、多くのユーザーはただぼんやりとした感覚を持っているにすぎないだろうが、専門家はより明確に記述し限定することができるだろうし、またそう努めるべきである。たとえば、ある専門家は、ネット公的領域への参加システムの理性的規則をまとめ、このシステムがすべての参加者に保障する点として、「政府の公共事業に関する議論への公平な参加」、「あらゆる主張を提示し、疑問を呈し、その主張の理由を提示する自由」、「公民とシステムが言論検閲の制限を受けず、開放的で平等な相互コミュニケーションを行えるコンテキスト」の三つを挙げている[郭、王 2005]。

経験的に観察される事実に着目するばかりでは、私たちの目に映るのは、さまざまな乱れた象だけである。だが経験的観察に視座を限定することが真に問題となるのは、インターネット公的領域が、経験的に観察され得る事実ではなく、経験に入り込み、これを主導する超越的・超越論的理性目的論に基づいて、形成、構築されているためだろう。そうでなければ、公的領域の構築など永遠にかなわない。例えるならばそれは、必ず1人や2人は交通規則を理解せず守らない人がいるものだ、という経験的事実のみ考慮しているかぎり、どんな交通ルールも整備することができないのと同じである。交通ルールや法律といった理性的行動規範を制定するためには、人間が理性的な存在者だと設定し、しかも理性的な目的論原則を起点とすることが必要なのであり、人間が理性を有するか否かについて行われた経験的観察と統計的帰納を根拠とするわけにはいかないのだ。

また、目的論的原則は外的なものでも、強制的なものでもなく、理性的存在者としての人間が内的に保有する主観的目的である。こうした主観的目的は、相互主体が論理的に推論するものであり、それは必然的にすべての理性的存在者にとって、普遍的に有効な客観的目的でもあるといえる。一部の論理上普遍化できない主観的目的は、すべての人に有効ではなく、したがって客観的な理性目的論にもなりえない。公的領域の目的論は、次のように要求する。「間主体性の原則に照らし合わせて、すべての人が公的領域でのコミュニケーションに参加できるのであり、資産や教育水準によってそれが制限されることはない。人々はただ言論の有効性の要求について責任

を負うだけでよい。一時的にこの有効性の要求が示せないにしても、主体同士は考えが一致するまで議論を続けることができる。したがって、普遍的語用論によって作られた理想的コミュニケーション共同体は一種の交流規範、つまり平等な相互的規範を示しているといえよう。平等な相互的規範とは、参加者全員が相互間のコミュニケーションを図ったり、関係性を保ったり、あるいは断言や紹介、解釈を行ったり、その願望や要求、感情を表現したりする際、かならず平等な機会を有していなければならないことを指す。同時に、その対話のなかで、発話者が普段のコンテクスト下で抑制しているかもしれない観点や立場を自由に表現するのを妨げる権力関係をテーマに、自由に議論できなければならないことも指す」[李佃来 2006: 215]。よって、「公的領域においてのみ、人々はあらゆる事柄がはっきりと見えるのであり、また公民も平等に対話し、事柄を表現し、デフォルメできるのである。そして互いに差別されることのない人たちが討論を通じて、個性をより鮮明に際立たせることも可能となるのである」[李佃来 2006: 81]。本来、インターネットを管理・監督するということは、任意にコメントを削除するのではなく、ユーザーが自分の発言に責任を持ち、法的責任追及に力を入れると同時にそのシステムを改善する、というのが正しい方向性であろう。たとえばハンドルネーム「長安剣」が指摘するように「ネットは自由だが、これはネット上の行為について責任を負わなくてよいという意味ではない。とくにこの発達した情報時代にあっては、ネットを表現の場とするニューメディアにおいて、投稿される言論と現実生活の行為が担う法的責任は同じである」。また、「マルチ参加は私たちユーザー 1人ひとりの自由を保障する空間であり、最低限の思想は1人ひとりの自由を保障する境界線である。ネット上の情報はまるで海であり、やがて合流し、海に流れ込む各情報は河流である。もしも川の流が汚れば、この川を生活用水とする人やここに棲む魚が追い詰められるだけでなく、川が通った各流域にも影響し、ひいては海洋全体の環境を悪化させるかもしれない。ユーザーとして、インターネットメディアとして、1人ひとりが自分の言論と行動に責任をもたねばならない、インターネットは無法地帯ではないのだ」[長安剣 2016]。

ここから分かるように、「ハーバーマスが述べる現代的な意味における公共圏とは、公民が観点や意見を交流するインターネットと言語的コミュニケーション行為によって構成される社会的空間と文化的空間を指す。それは公共的な意見と公衆世論がかたち作られる領域である。コミュニケーション行為が生まれる地点、生活世界が展開する場、複数の主体が理性的に意見を交わすような理想的コミュニケーション共同体であり、間主体性の視座から考察されるものである」[陸洲 2014: 171]。そして、「飯見て逃げた上海娘」をめぐるネット討論に参加したユーザーたちも、まさに期せずしてこれと同一の目的論的立場をとり、公的領域を共同で守り、構築したのである。さらに、日々成熟した理性的な姿で、自らの理性を公の場で使用し、しかも他のユーザーが自分の理性を公の場で使用することを許し、推奨し、尊重したのである。彼らは言動の面でしだいに理性的になっていっただけではなく、自分と他のユーザーがともに理性的であることを要求し、またそうであることを必要とした。たとえば、元記事の嘘が暴かれる前から、「曹林」は人々に、「人心を静めることができるような、冷静沈着に道理を説く者になろう」と呼びかけており[曹林 2016]、また「顔雲霞」も、「セルフメディアが高度に発達した今日、理性的に討論する習慣をかたち作ること、より多くの人々を惹きつけ、公共生活への積極的な参加を促すことができる」と指摘した[顔雲霞 2016]。その後はさらに多くのユーザーが自制を促す言葉を口にしていく。たとえば「劉鵬」は次のように述べる。「この事例はすでに公共的な話題になっており、我々は理性的にこれを見、慎重に論じる必要がある。(略) 男性と女性、都市と農村、よそ者と上海人、こうした相対する区分を設けて各々が肩を持つ側の一方に群がり、互いに攻撃しようというのは、まっ

たく主観的で、理性に欠けている」[劉鵬 2016]。また‘高路’は、「‘上海娘’は無責任にも中国社会が負っている傷口をさらに広げ、塩まで塗りつけたが、彼女の塩がもたらした苦痛の大きさは、人々に元の傷口よりもこの新しい痛みばかり記憶させてしまうほどだった。このことは、公平な機会、規則、権利が保障される社会の創造がいかに大切であり、そして焦眉の急であるかを我々に思い出させた」[高路 2016]としている。

こうしたコメントは、ユーザーたちがその日常生活において、しだいに理性的な主体として互いに見つめ合い、接する術を学んでいることを意味している。彼らは、この「飯見て逃げた上海娘」という話題を超えて、他のユーザーについてもより理性的な言行を要求し、「知的に現実を直視し、意味ある対話の道筋を作る」ことを求めた[黄灯 2016]。このような目標追求性は、インターネット公的領域を中国人の啓蒙と自己啓蒙の大切な手段、またはデモンストレーションの場としている。「いわゆる啓蒙とは、つまり自分で自分に課している未熟な状態から離れることである。個人について言えば、啓蒙とはある種の自己反省的な主体性の原則であり、人類全体について言えば、絶対的に公正な秩序へ向かう客観的な流れである。いずれの状況であろうと、啓蒙は公共性によって仲介される」[哈貝馬ス 1999：122]。少なくとも、「中国では歴史上、独立した理性的な大衆が公共的批判を通じて公衆世論を形成することは、つねに権力に阻まれ続けてきた結果、公的領域が実現されることはなかった。(略) ネットユーザーが1度ならず勝利を収めた背景には、ネット社会がしだいに伝統文化的な私から抜け出していることを示唆している」[何 2011：36-37]。つまり、中国のインターネット公的領域は、今まさにより多くのユーザーを精神的に鍛えており、彼らが自分で思考し、公の場で自己の理性を運用する理性的な主体へ、独立した個へと成長させているのであり、さらにはその周囲にも「日常生活領域の話題について常識的な論理をもって独立した思考を行うこと」を学ばせているのである[胡、陳、許 2016]。カントは1人の人間の「理性の公的利用(Der öffentliche Gebrauch seiner Vernunft)」とは、その人が学者として読書世界の全公衆の前で(vor dem ganzen Publikum der Leserwelt) 理性を用いることだと理解した。この種の利用が自由であるときに限り、人々に啓蒙をもたらすことができる、しかも、自由が許される以上、公衆の自己啓蒙は避けられない、と考えたのである[Kant 1784]。今日のインターネット上で、理性の公的利用は、もちろん学者に限定される話ではなく、誰もが公的領域で自分の理性を公的利用する勇気を持ち、また実際にうまく行っている。自らの理性を果敢に公的利用することによってのみ、公共生活における冷淡さや沈黙を退けることができるだろう。また理性をうまく公的利用することによってのみ、中国人の日常生活はよりよい生活へ好転するために、正当な理由と条件を獲得することもできるだろう。なぜなら、「人民は相互コミュニケーションの実践に基づき、公的領域での論争や討論、交流といった世論のかたちを通じて、政治的自由を脅かす暴力に抗い、民主制度を真の人民主権の実現とならしめる。専制主義とは物質的な強大な力の上に成り立つのではない、それは人民の政治への無関心の上に成立つのである」[張、陳2008]。一旦、「公的領域の中に身をおいて、公民が政治に参加し、公共事務に向けられる情熱と理性的に是非を判断する能力が高まれば、公民の公共精神と公民意識は生まれ、発展する」のであり、また「公的領域の真髄は、それが理性を有する批判的公共言説空間であること、そして公的権力を監視できることにある。中国という国のコンテクスト下において建設的な公的領域を構築せんとする際にも、同様にこのように独立した空間が必要になる。そしてここから強大な公衆世論を形成し、公的権力を監督し、政府の理性的な政策決定を助けるのだ」[劉森 2010]。

現在、中国人の日常生活における公的領域に対して、インターネットは技術的な可能性を提供している。また、中国の伝統的な私民が現代的な公民へ変容する良いきっかけをもたらしてもい

る。このグローバル時代においては、もはやバーチャルな公的領域と実体としての公的領域が、広範囲にわたって一体化してしまっている。とくに中国では、その他の公的領域の建設が遅々として進まないなかでも、インターネット公的領域が他に先んじて形成されつつあり、公的領域の先駆け、先導となる可能性がある。もちろん、「インターネットは現代の独立した人格が有する自主、自由、平等、理性といった内的性質の表出と成長に新たな空間を開拓した」だけではなく、他方ではやはり、「ネットはしょせん技術にすぎず、自動的に自由と平等を運んできてくれるわけではない。技術に頼ってばかりいると、ネットは自由と平等の感覚（真の自由とは理性の自由であり、感覚の自由だけを指すのではない）をもたらす一方で、新たな不平等と等級化も生み出すのであり、公民社会の価値が自動的に実現されることはないのである」[戸 2014 : 22-223]。したがって、インターネット公的領域の形成と構築は、やはりネットユーザーの理性的な目的論的实践によるところが大きくなる。たしかに「中国というコンテキスト下にある公的領域には公的権力の痕跡が色濃く残る」[劉森 2010]とはいえ、中国の「インターネット公的領域は公民社会の建設を扶助、推進する装置になり得るかもしれない」[葉 2011]という点を無視すべきではないだろう。しかも、インターネットはたしかに中国の公的領域を成熟へと導く最善の手段かもしれないのである。「インターネット公的領域は現代社会に再生の希望をもたらした。公衆はゲームのルール制定に参加することで、さまざまな社会システムのセルフフィードバックの能力を高めている」のだから[陸宇峰 2014]。欧米社会と異なるのは、「西洋ではインターネット上の公民社会はリアルな公民社会の補足に過ぎないが、中国では中国公民社会を発展させる新しい力となっている」点である[劉学民 2010]。ここから次のように述べることもできるだろう。インターネットはすでに中国人に「脱政治化した、日常的な、生活的な領域を提供しているが、このバーチャルとリアルが密接に結び付いた領域では、しだいに多くのユーザーが積極的に行動することで、インターネット上の公民になっていった」[趙晴 2016]と。

我々は「飯見て逃げた上海娘」をめぐるネット討論から、中国のインターネット公的領域が成熟へ向かう様を見て取ることができるだけでなく、同時に、中国の日常生活における理性的な行動者及びその超越的・超越論的な目標追求性が、中国人社会の現代化に少なからず重要な意義を持つことも確認できる。ここから、インターネット公的領域がやがて中国人の日常生活に根本的な変化をもたらすであろうことが予測される。公的領域において、果敢にうまく理性を公的利用し、自らの理性を鍛錬することによってのみ、中国人の日常生活は現代社会において再び安定し、保証され得ることができるのだろう。そして、ある意味論証を経たうえで当然性を獲得し、その理性の目的論的価値をよりよく実現できるようになるだろう。このような見方をしてはじめて、中国人の日常生活をめぐる民俗学研究は、たんにディシプリンに新たな領域を切り開くとか、ディシプリンの地盤を拡大するといったことに終始する現状から抜け出せる。そして、まるで人間の痛みと無関係であるかのような表面的な描写を減らし、中国人の日常生活が正当化され、改善されることに貢献することもできるのだ。社会的機能の上からいえば、欧米における民俗学はおそらく「錦の上に花を添える」ようなものかもしれないが、中国ではあくまで「雪中に炭を贈る」行為が求められているのである²。

3. 日常生活における超越意義と超越論的価値をどう見るか

日常生活をめぐる中国特有の問題の一つに、日常が非常であること、そしてそれが理性化を通

じて正常へ転化しているという点がある。中国人民民俗学者は、決してこの問題を避けているわけではない。1994年、高丙中は早くも次のように指摘している。「現代の中国人民民俗学者は民俗生活を研究することで中国人の人生に、その伝統から現代への大転換のなかで異常なほど艱難と困窮に満ちた人生に、関心を寄せることができる」[高丙中 1994: 146]。2006年には、呂微が「原始的な生活世界」とは「超越論的な、相互的な主体同士が自由に出会い、平等に対話する基地」であると、この考えに基づき、日常生活の超越的意義と超越論的価値について新しい理解の道筋を示した[呂 2006]。そして筆者も2008年にフッサールの生活世界概念の真意及びそれが民俗学にもたらし得る示唆的意義について、比較的系統立った研究を行ったことがある。同じ拙稿において、「民間文学あるいは民俗学の生活世界をめぐる研究は実際には超越論的科学あるいは超越論的科学である。この意味において、純粹民間文学研究・純粹民俗学研究は本質的に超越論的あるいは超越論的科学であり、実証主義的意味における客観科学に再び立ち戻ることはない」と主張した。筆者はこのディシプリンに論理的な審査を経た根拠を探し出したかったのではなく、その目的は中国人の日常生活に超越論的な理論の基礎を築くことにもあった。

こうした研究は、多くの民俗学者がまったくの無駄だと考えるかもしれない。なぜなら「このディシプリンが誕生してから今日に至るまで、あらゆる国の民俗学が具体的な対象研究であり、抽象的な哲学思索ではない。言い換えれば、民俗学は生まれた瞬間から経験的なディシプリン」なのであり、それは「経験的」なおかつ「現下志向的」なのである[王傑文 2013]。だが本稿では、民俗学に超越的・超越論的な研究の方法が存在してもよいだけでなく、存在する必要があることを主張したい。なぜなら、民俗と日常生活にはもともと超越的意味と超越論的価値が含まれているのであり、こうした研究方式をとることで、日常生活に潜む中国問題をより有力に直視でき、また民俗学をさらに「現下志向」の学問へ導くこともできると考えるからだ。

民俗学の主流側に立つ学者たちは、他の社会科学の学者と同様に、フィールドワークにおけるいわゆる目に見える事実を盲目に信じている。だが実際は、マジックショーなどを思い浮かべれば分かるように、仮に経験観察の視座のうえから見たとしても、目に見えるものが事実とは限らない。重要なのは、人文科学と社会科学がおもに研究しなければならないのは、観察可能な事実ではなく、あくまで意味と価値なのだという点である。そしてドイツの思想家が人文科学と精神科学の方法論について行った内省は、次のように教えてもくれる。一般的に、意味と価値は直接見られるものではなく、超越的・超越論的性質を有しているのだ、と。事実のみを観察したとしても、同じフィールドの現場にいたとしても、それが異なる観察者による観察であれば、あるいは同一の観察者でも異なる問題意識を有しているときならば、見えるものと理解するものは必ず異なってくる。たとえば、彭牧がフィールドワークの経験についてまとめた以下の記述には、この点がよく示されているだろう。

最初の頃、私は茶陵の葬儀がどう進行されるのかあまり理解しておらず、事前に良い場所を陣取ることができなかった。よって、特殊な意味のある場面をうまく撮影できなかったり、撮り逃がしたりしてしまった。3度、4度と撮影したあと、ようやく亮文の指導の下、全過程を撮影することに成功したが、しかし、私と亮文の撮影の角度はまったく異なっていた。私の関心は儀式の進行過程の細部に、とくにアカデミズムが注目する記号やシンボル、経文などに集中しており、儀式の参加者については、時に個人情報保護の観点から、正面から取り上げることを意識的に避けていた。一方の亮文は、自然と現地の人々のために撮影しており、その主な目的は、儀式の全過程を表現し、全参加者（親戚、友人、隣人等）を完全に記録する

ことにあった。したがって、彼は儀式の重要な節目では、すべての参加者を正面から撮影していた。亮文の録画はまるで洗練された結晶体のように、現地の人々の観念と生活世界を映し出していた。彼の映像を詳細に味わうことで、私はやっと本当に現地の生活へ歩み入ることができた。

儀式の順序について理解を深めてゆくにつれて、私は自在にビデオカメラを操って、意味があると感じるすべてを撮影できるようになっていった。すると、面白いことが起きた。カメラのレンズに、私が当初意識していなかった、あるいは無理解ゆえに見落としていた細部がしばしば入り込んでくるのである。録画を見直している際に、亮文や近くにいた人の解説によって、私はそれらをはじめて見、聞いた。もしも映像記録がなければ、もしも見直した時に現地の人からの指摘がなければ、私のようなよそから来た調査者は、おそらく永遠に自分が実際はそれらを見ていた、聞いていたことに気づかなかっただろうし、当然それらの意味に注目することもなかつただろう。ビデオカメラのレンズで見る方法、聞く方法自体は私が制御していたが、その機械的な記録方法は私の感覚器官を超越しており、私が感知していないものを見、聞いていた、といえるだろう。よそから来た観察者である私の感覚器官は、自分が理解可能な情景、あるいは予想と合致する情景を捉えようとする傾向がある。もちろん、予想をはるかに超えるような重大な場面を見逃すことはあまりないだろうが、現地の文化を熟知しているからこそ注意を払うような細部については、やはり視野に入りながらも見えない、耳に入っているのに聞こえない、ということになりがちで、こうした細部はレンズを通じてすべて逃さず記録することによって、ようやく私の研究視野に入ってくる。この意味において、ビデオカメラのレンズ越しに行った機械的な記録こそが、儀式の進行中、少しの不注意で瞬間に消え去ってしまう細部に、私を気付かせた、そしてその進行の過程についての研究を可能にしたのだ、といえるだろう[彭牧 2011]。

ここで述べられているのは、まだたんに事実を観察する際の経験的な立場と角度の問題に過ぎない。実際には、民俗学のフィールドワークは事実やその細部の観察のためにはなく、事実及びその細部を通じて、超越の意味と超越論的価値を理解するために行われる。フッサールが言うように、「誰でももともと超越論的自我を有している」おり[Welz 1996: 69]、人は(経験を)超越した存在者を辞めることなどできない。同様に、人の日常生活もまた、直接観察不可能な超越の意味と超越論的価値を常に有している。しかもこの種の意味と価値は往々にして日常生活の実践の本質を構成するものである。一部の民俗学者は、こうした超越の意味と超越論的価値の存在を認めながらも、それはあくまで民俗学ではなく哲学が目指すべきものだと考えている。しかし、もしも民俗学者が経験的観察の水準に留まって超越の意味や超越論的価値を軽視し続ければ、「私のようなよそから来た調査者は、おそらく永遠に自分が実際はそれらを見ていた、聞いていたことに気づかなかっただろうし、当然それらの意味に注目することもなかつた」というような事態から抜け出せない。そればかりか、根本からして、「本当に現地の生活へ歩み入る」ことはできないかもしれない。こうしてみると、学者の感覚器官がかえってビデオカメラのような「機械的な記録方法」に「超越」されかねないばかりか、「毎日口々に『民間へ行こう』、人と生活の生き生きとした経験に向き合い、『深く入り込んだ』フィールドワークを行おうと叫びながら、かえって真に息づいた中国特有の課題に対し目と耳をふさいでしまう」ことにより、「中国の真の問題が学者の指の隙間からいとも簡単に流失してしまう」事態を招きかねないのだ[呂 2015]。

したがって、対象の意味と価値の超越性および超越論性そのものが、私たちの研究もかならず

それに対応した超越的、超越論的立場をとらなければならないことを決定付けているといえるだろう。一部の民俗学者は、フィールドであたかも直接現実に足を踏み入れたかのように感じるかもしれないが、この超越的・超越論的立場を欠いているがゆえに、日常生活に本来含まれる超越的意味と超越論的価値がそもそも目に入らず、実際にはかえって現実から遠く隔たっているかもしれない。一般的に、民俗学者はフィールドからいわゆる第一資料を獲得するとその地を去る、あるいは、定期的、不定期に再訪して自分の経験的認識を検証・修正する。このように空間上は最も近い距離が、ともすれば時間の上で最も遠い距離にもなり得るのである。こうした研究は民俗学者に関係してくるが、普通の人々とはほぼ無関係なものである。民俗学者がさまざまな理論手法および視点をもって、いわゆるフィールドに足を踏み入れるとき、もちろん種々の自然的因果関係を見出し、さらには研究される者の主観的な考えすらも色々見出すことができるだろう。しかし、人間と事象は、私たちの目に映る事実以上のものである。日常生活の実践において、超越的意味と超越論的価値は観察可能な事実の中に含まれているかもしれないが、直接見られることはほとんどない。とくに実践の領域で私たちが目にするのはたんなる感性的な考えや具体的な目的に過ぎないことが多く、超越的意味と超越論的価値、あるいは理性的目的を目にすることはできない。そして、「探求を導く指導原理を欠いたまま、経験の世界を不器用にあちこち歩き回るだけでは、合目的なものは何も見出されないだろう。このことはおそらく疑いようもなく確実である。じっさい、経験を方法的に遂行することこそが、観察するということ」である以上、私たちに求められるのは、「理論がわれわれを見捨てる場所では目的論的原理から出発する」ことであり、「理論的な認識源泉だけで十分でない場合には、目的論的原理を用いてよい」ことになる[康德 2010: 158-160]³。これを簡潔に述べるならば、民俗学が日常生活について行う観察に、目的論的原理を導入するのが必要であり、これによりその観察に理性的な方向性と根拠を付与することができるのである。つまり、民俗学の観察は、経験的現象のすでに存在する様と今まさにそうである様のみを対象にして、そこに留まってしまうのではなく、それらを超越しなければならないのだ。あるいは、理性的なあるべき姿や、あるいはそうあり得る可能性という目的論的視座から、経験的現象のある様を見なければならない、といってもよい。これは民俗学者が個々の趣味や志向性に依拠してそうすべきと推奨されるようなものではなく、日常生活が最初からこうした超越的意味と超越論的価値を含有しているがゆえに、すべての民俗学者に突き付けられる客観的要求である。「ここから次のように言うことができるだろう。いわゆる超越論的なディシプリンの概念というのは、決して一部精鋭の前衛的思想のひらめきによるものではない。自由や平等の観念はそもそもこのディシプリンの対象—つまり普通の人々、一般庶民の主観的意識に内在するものである。学者の仕事は、ただディシプリンの超越論的理念を通じて、彼らの先天的観念を意識的に表出させるだけにすぎない(カントは自分が道徳法則を発明したのではなく、ただ一般の人々の理性的な意識の中にすでにあるものを発見しただけだと繰り返し強調した)」[呂 2013]。

先に述べたように、本稿の目的の一つが、日常生活において民衆が本来こうした超越論的な目的論的理想と渴望を有していることを提示し、表現する点にあった。もしも経験的観察に視座を限定すれば、かつて多くの民俗学者がそうであったように、日常生活に固有な超越論的なこの理想と渴望を見ても見えず、聞いても聞こえない。こうして考えてみると、民俗学の日常生活研究とは「普通の人々の日常生活は何をもって当たり前たるかを論証する」ことなのであり[呂 2013]、私たちが超越論的・超越的な理性的目的論から着手しなければならないというもの、こうした目的論が本来日常生活にア priori に含まれているからであり、また、中国という国では特にこうした目的論の視座を強調する必要があるためである。そうすることによってのみ、中国

古来の経験主義的・実証主義的伝統を超越し、ここから、「自由な理性的意志に基づいて正しいことを選択できる、これこそが普通の人、つまり一般庶民の日常生活の当たり前（合理的かつ合法的）の超越論的根拠である」[呂 2013]ことが理解されるだろう。そして本当の意味で、日常生活に潜む中国固有の問題に触れながらも、学術上の報道ジャーナリズムに陥ることも避けられるのだろう。「すでに改変された現実と直面した以上、民俗学は日常生活の正当性を拒否ひいては否定する現状を改め、日常生活の当然性へ向き直らなければならない。日常生活の当然性とは、普通の人々にとって、信頼に満ちた尊敬ある生活がきわめて基本的であることを意味するが(略)、特定集団の日常生活は機械的に当たり前だと考えられることはない。現在、我々は日常生活が当たり前なものとして人々に受け入れられるよう努力しているが、この努力は自由や平等といった超越論的な普遍的観念に支えられなければならない。このとき、日常生活のあるべき様と当然性は、ようやく知識によって保証され得るのである」[高丙中 2013]。したがって、中国民俗学の日常生活研究が真の「現代学、現在学」になるには、「かならず超越論的理想を志向する尺度を有する現代学、現在学」になる必要があり、「さもなければ価値論の前提を持たない似非現代学、似非現在学」に成り果ててしまうのである[呂 2015b : 528-529]。

この点について、本稿で見てきた「飯見て逃げた上海娘」という事例をめぐるネット討論からも、超越論的な価値的理想というものが遠いどこかに存在しているようでありながら、実際には私たち1人ひとりの心のうちにある（超越論的に含まれている）ことが分かるだろう。その一方で、あの科学のような外見を装った経験的観察は、日常生活の現場の最前線に陣取っているかのようでありながら、中国人の日常生活が直面しているもっとも緊迫した問題については、かえって上澄みを掬うだけであったり、痒いところに手が届かなかったり、あるいは完全に逆方向を向いていたり、まったくの無関係であったりしてしまうのである。

注

- 1 黄月琴はハーバーマスの公共圏概念がたんなる理想類型にすぎず、現実の描写に用いるには適さないとし[黄月琴 2009]、また陸宇峰などは伝統的な公共圏概念はすでに時代遅れだとしている[陸宇峰 2014]。
- 2 日常生活がすでに常態化し、法的に保障されているドイツ語圏においても、学者たちは日常生活の「心地よさ」を研究する際に公民の姿 (bürgerlicher

Habitus) との関連性を忘れてはいない [Schmidt-Lauber 2003 : 145 ; Graschitz 2013]。

- 3 本文ではカントのいわゆる「目的論」とは多少異なる意味で目的論という言葉を使っており、それは判断力上の目的論ではなく、理性的な主体が論理上普遍化できる実践の目的を指すものである。

参考文献

- 阿強同志 2016 「吓跑上海女孩的团饭飯、映照別一片真實的中国」 <http://blog.ifeng.com/article/43793226.html?touping>
- 冰馮雪梅 2016 「上海姑娘江西男為什麼能『紅』這麼久」 <http://news.sina.com.cn/o/2016-02-16/doc-ixpmpqq7763773.shtm?cre=sinapc&mod=g&loc=21&r=0&rfunc=6> (2016年2月16日『中国青年報』)
- Brigitta Schmidt-Lauber, 2003, *Gemütlichkeit. Eine kulturwissenschaftliche Annäherung*. Campus, Frankfurt am Main und New York.

- 才讓多吉 2016 「城市女和農村男故事背後的隱喻」 <http://news.sina.com.cn/pl/2016-02-12/doc-ixfxpmpqt1100545.shtml?cre=newspagepc&mod=f&loc=3&r=9&rfunc=6> (2016年02月12日「南方都市報」)
- 曹林 2016 「做一個讓人安靜的平靜講理者」 <http://news.sina.com.cn/o/2016-02-19/doc-ixfqrqea4711958.shtml?cre=sinapc&mod=g&loc=16&r=0&rfunc=6> (2016年2月19日「中國青年報」)
- 曹林 2016 「別給「假新聞」找「真問題」的台階了」 <http://news.sina.com.cn/pl/2016-02-24/doc-ixfprucu3164143.shtml?cre=sinapc&mod=g&loc=10&r=0&rfunc=6>
- 長安劍 2016 「『上海女孩逃離』鬧劇：被愚弄之後我們只有難堪和憤怒嗎？」 <http://news.dahe.cn/2016/02-21/106458819.html>
- 陳方 2016 「『上海姑娘』卸粧了、『返鄉筆記』謝幕了」 <http://news.sina.com.cn/o/2016-02-19/doc-ixfprucp9448961.shtml?cre=sinapc&mod=g&loc=1&r=0&rfunc=6> (2016年2月19日「中國青年報」)
- 陳嵐 2016 「他們為什麼不娶小芳？(逃飯門統評)」 <http://blog.ifeng.com/article/43799598.html>
- 單士兵 2016 「鳳凰男過完年就不要再唱哀故鄉了」 <http://blog.ifeng.com/article/43832816.html?touping>
- 丁啓陣 2016 「我們都是白骨精」 <http://ding.qizhen.blog.163.com/blog/static/13744025020161209460314/?jishi>
- 郭玉錦、王歆 2005 「網上公的領域」《北京郵電大學學報》3
- 高丙中 1994 《民俗文化與民俗生活》中國社會科學出版社
- 高丙中 2013 「民俗學對象問題的再討論——一項建設的後現代性的碩果」《民俗研究》4
- 高路 2016 「『上海女』假新聞、在社會傷口上撒了把鹽」 <http://news.sina.com.cn/c/2016-02-22/doc-ixfprucp9634938.shtml?cre=newspagepc&mod=f&loc=17&r=9&rfunc=6> (原載2016年2月22日「錢江晚報」)
- 狄爾泰、威廉 2002 《精神科學引論》1 中國城市出版社(W.ディルタイ『精神科学序説』、三枝博音訳、1928)
- 哈貝馬斯 1999 「公的領域的結構轉型」曹衛東、王曉珏、劉北城、宋偉傑譯，學林出版社(J.ハーバーマース『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』、細谷貞雄、山田正行訳、1973)
- HABERMAS, J. 2001 *Kommunikatives Handeln und detranszendentalisierte Vernunft*, Philipp Reclam jun.
- GANDER, H. 1988 *Positivismus als Metaphysik. Voraussetzungen und Grundstrukturen von Diltheys Grundlegung der Geisteswissenschaften*, Verlag Karl Freiburg.
- 何麟 2011 《虛擬社區中公的領域的建構——以上海「釣魚執法」為例——南京航空航天大學修士學位論文
- 黃灯 2016 「鄉村更需要理性善意的行動(青年觀)」 <http://opinion.people.com.cn/n1/2016/0223/c1003-28141086.html> (原載2016年2月23日「人民日報」)
- 黃月琴 2009 「『公的領域』概念在中國傳媒研究中的運用」《湖北大學學報》6
- 胡安琪、陳亞楠、許諾 2016 「虛假網文、為何攪動一池情緒」 http://blog.sina.com.cn/s/blog_63f239d50102w5qt.html#cre=blogpagepc&mod=f&loc=11&r=6&rfunc=6 (原載2016年2月23日「人民日報」)
- 霍真布魯茲老爺 2016 「上海女孩逃離了新農村、農人自己也逃離了」 <http://www.15yan.com/topic/bian-ji-tuijian/6NgeM1CNgMT/>
- 戶曉輝 1996 「姥姥走了」《綠洲》1
- 戶曉輝 1999 「故鄉之殤」《綠洲》3
- 戶曉輝 2008 「民俗與生活世界」《文化遺產》第1期
- 戶曉輝 2010 「返回愛與自由的生活世界：純粹民間文學關鍵詞的哲學闡釋」江蘇人民出版社
- 戶曉輝 2014 「民間文學的自由敘事」社會科學文獻出版社
- 敬一山 2016 「別扯什麼『就算女孩是假的問題是真的』」 <http://blog.ifeng.com/article/43895488.html?touping>
- 康德 2010 「論目的論原則在哲學中的應用」《康德著作全集》8 中國人民大學出版社 (I.カント「哲学における目的論的原理の使用について」、望月俊孝訳、『カント全集14』、岩波書店)
- KANT, I. 1784 *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?* (I.カント「啓蒙とは何か」、福田喜一郎訳、『カント全集14』、岩波書店)
- 卡西爾、恩斯特 1991 「人文科學的邏輯」中國人民大學出版社 (E.カッシーラー『人文科学の論理—五つの試論』、中村正雄訳、1976)
- 李拯 2016 「農村、說聲愛你太沈重」 http://news.ifeng.com/a/20160213/47416439_0.shtml (2016年02月13日「人民日報」)
- 李凱爾特 1986 「文化科學和自然科學」涂紀亮譯，商務印書館(H.リッケルト『文化科学と自然科学』、佐竹哲雄、1922)
- 李潔 2011 「論互聯網在中國社會公的領域形成中的作用」《今傳媒》8
- 李佃來 2006 「公的領域與生活世界——哈貝馬斯市民社會理論研究——」人民出版社
- 劉德秦 2016 「你信嗎？反正我不信！」 <http://blog.ifeng.com/article/43895456.html?touping>
- 劉鵬 2016 「對「一飯分手」不能簡單站隊」 <http://news.sina.com.cn/pl/2016-02-16/doc-ixfmpqt1280506.shtml?cre=news>

- pagepc&mod=f&loc=12&r=9&rfunc=6 (2016年2月16日『北京晨報』)
- 劉森 2010 「博客與中国語境下的公的領域」『新聞世界』6
- 劉雪松 2016 「感謝那些「不放棄那個上海女孩」的人們」<http://blog.ifeng.com/article/43830317.html>
- 劉學民 2010 「網絡公民社会的崛起—中国公民社会發展的新生力量—」『政治学研究』4
- 陸洲 2014 『論哈貝馬斯程序主義法範式及其中国意義』人民出版社
- 陸宇峰 2014 「中国網絡公的領域：功能、異化與規制」『現代法學』4
- 呂微 2006 「民間文學·民俗學研究中的「性質世界」、『意義世界』與『生活世界』—重讀『歌謠』週刊的『兩個目的』—」『民間文化論壇』3
- 呂微 2013 「民俗學的哥白尼範式」『民俗研究』4
- 呂微 2015 「民俗學的哥白尼革命—高丙中的民俗學實踐「表述」的個案研究—」『民俗研究』1
- 呂微 2015b 「民俗學：一門偉大的學科：從學術反思到實踐科學的歷史與邏輯研究」中国社会科学出版社
- 馬小塩 2016 「春節鏡像：中国人的經濟學人情與動物學人生」<http://culture.ifeng.com/insight/special/springfestival>
- 麥徒 2016 「我們的精神故鄉已沈無可沈」http://news.ifeng.com/a/20160216/47447935_0.shtml#_www_dt2
- 南方都市報 2016 「關注鄉村、請勿隨春節落幕而消退」http://epaper.oeeee.com/epaper/A/html/2016-02/15/content_10878.htm (2016年2月15日『南方都市報』社論)
- 南方新聞網 2016 「現實沒童話！揭秘第一頓飯就分手的上海女和鄉村真相（圖）」http://gz.southcn.com/content/2016-02/12/content_142309156.htm
- 彭牧 2011 「技術、民俗與現代性的他者」『西北民族研究』1
- 深山野民 2106 「コメント」<http://news.sina.com.cn/pl/2016-02-24/doc-ixprucu3164143.shtml?cre=sinapc&mod=g&loc=10&r=0&rfunc=6>
- 宋吉永 2015 「隱藏在「大數據」背後巨大財富」, 安胜煜译, 清華大学出版社
- GRASCHITZ, S. 2013 *Bürgerlicher Habitus in der Sitcom "How I Met Your Mother"*, Diplomarbeit, Universität Wien, Philologisch-Kulturwissenschaftliche Fakultät
- 搜狐新聞 2016 「網絡部門証實：『上海女孩逃離江西』為虛假內容」<http://news.sohu.com/20160221/n438005140.shtml>
- 唐映紅 2016 「上海女假了、為何全國網友假劇真做？」<http://news.sina.com.cn/pl/ch/2016-02-21/doc-ixprucs6308162.shtml?cre=newspagepc&mod=f&loc=8&r=9&rfunc=6>
- 姚樹潔 2016 「被上海小資女拋棄的男友無需流淚」http://blog.sina.com.cn/s/blog_66ccfa60102w690.html?lj=1
- 王傑文 2013 「『生活世界』與『日常生活』—關於民俗學「元理論」的思考—」『民俗研究』4
- 韋伯、馬克斯 2013 『社會科學方法論』商務印書館(M.ウェーバー『社會科學的方法』, 祇園寺信彦譯, 1994)
- 魏春亮 2016 「我們最終逃離沒有出路的農村」http://blog.sina.com.cn/s/blog_615f9f420102whfp.html
- 聞欣 2016 「所謂農村問題、都是中國問題」<http://news.ifeng.com/opinion/fenghuanglun/fenghuanglun109/1.shtml>或<http://123kkgxw.blog.163.com/blog/static/796255201611710397214/?touping>
- WEISS, R. 1946 *Volkskunde der Schweiz. Grundriss*, Eugen Rentsch Verlag.
- WELZ, F. 1996 *Kritik der Lebenswelt: eine soziologische Auseinandersetzung mit Edmund Husserl und Alfred Schütz*, Westdeutscher Verlag GmbH, Oplade
- 夏振彬 2016 「『上海女孩逃離農村』的浮躁迷失」http://hainan.ifeng.com/a/20160222/4292956_0.shtml (原載2016年2月22日『北京青年報』)
- 新浪新聞中心 2016 「上海姑娘逃離江西農村營銷騙局大揭露」<http://news.sina.com.cn/m/dq/2016-02-17/doc-ixpmpqp7865238.shtml>
- 楊耕身 2016 「『返鄉日記』裡、有更大的未來」http://epaper.jinghua.cn/html/2016-02/15/content_280517.htm (原載2016年2月15日『京華時報』)
- 楊耕深 2016 「『網絡部門』能否像輿論一樣思考」http://blog.sina.com.cn/s/blog_77b39ffd0102wvew.html#cre=blogpagepc&mod=f&loc=3&r=6&rfunc=6
- 顏雲霞 2016 「『返鄉記』該成為重構鄉村的契機」<http://www.kaixian.tv/gd/2016/02/19/121691.html> (2016年2月19日『新華日報』)
- 葉嵐 2011 「哈貝馬斯語境下的中国網絡公的領域」『中国非常利評論』2
- 一介草民 2016 「為何一則虛假帖子讓網絡炒翻了天？」http://blog.sina.com.cn/s/blog_4e0ceb490102wh7d.html#cre=blogpagepc&mod=f&loc=19&r=6&rfunc=6
- 余旂 2016 「『上海女孩逃離江西農村』, 我們還得破除多少謠言」<http://review.cnfol.com/minshengzatan/20160224/22300119.shtml> (2016年2月24日『光明日報』)

- 張雲龍、陳合營 2008 「從生活世界到公的領域：現象学的政治哲学轉向」『人文雜誌』6
- 趙晴 2011 「淺談網絡公民社会之雛形」『社科縱橫』（新理論版）1
- 中國網 2016 「網傳上海女逃離江西農村男友家 網友稱內容多處存疑」<http://news.365jilin.com/html/20160213/2205181.shtml>
- 周明華 2016 「被胡騙得虛脫的不是上海女孩逃離故事而是自媒體理性」<http://blog.ifeng.com/article/43895069.html>